

◎すくすくと　　み　な　み

わが心小鳥の如くちよこちよこ草ほのあをむ
 丘に來れり
 思はざる樹に二つみつ新らしき芽を見てたる
 あさのよろこび
 よきことのしらせのやうに思はれて樹々のわか
 めに目をあそばせぬ
 のびてゆく草のやうにもすくすくといのちのび
 んど野にいててゆく
 のこりたる雪の中よりすくすくとべんべんぐさ
 ののびてゆくかな
 陽をすひてさやりもあらずのひでゆく若草のあ
 をにながめいりけり
 病院のまごの下なるいささかの土にも草のあを
 むうれしさ
 ほの青むうらわかくさのなつかしく軟き土ほり
 かへすかな
 ものいはすこもれる人の庭なれど春の命の青む
 うれしさ

◎かろがろと

文科一部三年 齋藤 加津

花ならばわれコスモスになりなましか、はりも
 なくのひてくせなき
 静なる春の光りにひたりつゝ鶯をきく身をはう
 れしむ
 朝のもやや、にうすれて山のひた赤く輝き明け
 そむる湖
 夕されはさためのように町の灯を見るをうれしみ
 ゆきなれし丘
 月青くさせるベツトに憂なくこほろきを聞く秋
 のうれしさ
 うす青うかすむ夕の遠山の山のかひより汽車の
 走り來
 飛行船ふはりと浮ふことくにも雲ひとつある夕
 焼けの空
 寸はかりのびし小麥に縞なして雪かろかるとお
 ける春の野
 ものかけにちらとかくれてわれを見る大きうな
 りし末の妹

隨筆

◎一輪草

わ　か　な

もうあれから半年余りになる。年も新たにな
 つた。けれども姉を看病しながら一月ばかり國
 の病院に過したあの頃のことには今もありありと
 思ひ出される。
 姉の病室は拭き磨かれた長い廊下を通つて行
 く院内の一番奥の病舎にあつた。かなり廣い通
 氣のいゝ明るい室に姉は村尾さんといふ若い弱
 々しい人と二人ベッドを並べて病を養つてあ
 った。この室内には別に三疊敷の附添人の部屋が
 二間しきつてあつた。私は夏の盛りを此三疊敷
 の内で過したのであつた。
 姉の病氣は東京から想像してゐた程に重くは
 なかつた。その蒼白い顔に病む人らしいやつれ
 と淋しさを見るの外目に立つほどの瘡せも見
 えなかつた。隔日にする注射のために發熱する
 時の外晝間は大低ベッドを離れて植込に面した

涼しい廊下に椅子を持ち出して新聞や雑誌を讀
 んだり院内で親しくなつた人達と話したりし
 た。重患者のなかつた此病舎は割合に陽氣であ
 つた。
 上原さんといふ上品な年増の奥さんが見舞に
 貰つた物らしい果物や菓子を持つてよく話しに
 來た。姉は一番彼女と親しくした。彼女は一家
 の混亂からひざいヒステリーになやんでゐた。
 私は少女のやうな表情のある眼に涙を湛へてど
 らはれた不幸な身の上話をする時の彼女が一番
 好きであつた。
 村尾さんは白百合が好きであつた。柱掛の水
 色の花瓶には香の高い純白の百合が殆どいつも
 絶えなかつた。彼女の弱々しい容姿は露を含ん
 だこの花のやうであつた。
 或日彼女の下女が外から小さい一輪草
 の鉢植を持つて歸つた。柔かな莖の頂きに可愛
 い桃色の花が一つ咲いて蕾が二つ三つあつた。
 彼女はまたこの花を愛した。水を與へたり暖か
 い日の光を吸はせたり色々自分世話をし

た。それから彼女の枕邊には毎朝天使が置いて行つたかのやうに小さな花が一輪づゝ咲くやうになつた。白や赤のも咲いた。

姉は朝と夕方とに自分が信仰してゐる神に祈りをささげた。細いふるへを帯びた祈りの聲のする時私は部屋をぬけ出して廊下で顔を覆うて泣くことがあつた。細り行く生命を暗示するやうな姉の聲に私の胸は腐蝕されて行くかのやうに痛むのであつた。けれども私は膝まづいて祈ることが出来なかつた。神を知らない私のかたくなる心を私にはこの場合どうすることも出来なかつた。

夜は姉も村尾さんも早くから床についた。青い紙で包んだ電燈の淡い光が静かな二人の眠りを見守つた。森として更けて行く十一時頃に夜勤の看護婦が忍びやかに入つて来て蚊張の外から病人の様子を見てやがて忍びやかに出て行くのであつた。深い夜の沈黙から静かに現はれて静かに消えてゆくこの白衣の人を私は三疊間から蚊張越に眺めることがしばしばあつた。

全快して退院して行く人や新たに入院する人などがあつて私は二十日余り居る間にこの病舎の人は大方新らしくなつた。上原さんも退院して行つた。彼女は玄關まで見送つた姉の手を取つて涙を湛へて姉の病の全快を祈つた。彼女の家からは誰も迎ひに来る者がなかつた。同情者のない冷たい家庭に歸つて行く彼女の車を見送つて姉も私も全快しきらぬ彼女の病を氣遣つたのであつた。

姉と村尾さんとは幾人かの知人を送つてなほ後に残つた。八月の中旬になつた頃病院の庭にも百日紅の花が咲きそめた。姉は常のやうに氣分のいい時には椽に出てこの花を眺める事を好んだけれども其頃から話することを物憂いやうにして獨り物思ひに沈むやうな時が多くなつた。そして時々思ひ出したやうに指を折つて入院してからの日數を數へたりした。姉が入院してから三ヶ月の日數が間もなくつきようとする頃であつた。

濃い緑の葉蔭に赤い花は日毎に増して行つたけれども姉の病は良くも悪くもならなかつた。(完)

◎笠井さまに

み な み

私其の手から貴女を奪はれてからもうかれこれ半年にもなりません。初めての都會生活はあなたに活動の喜びを齎しました。あのすがすがしい眼は美しいものへ眞實の方へと向けられたのでした。そしてあなたの明日はより明るいより遙かなところにあつたのでした。

「實は私あの三月十九日の朝青山先生に恐ろしい宣告を受けた時も左程に驚きませんでした。若い私等がこれ位のこと直に治る。治る。治ると思ひましたから。」

かうして其の生れた國へ歸られたあなたの御手紙にはいつか「治るでせうか」といふ文字が見える様になりました。醫者のいふことには盲従しなくてはならぬのでせう」ともありました。

「もうなるがまゝにまかせます」とも書かれたのでした。

「前途は闇に閉された。親しい人が一人一人自分を離れてゆく。遣る瀬ない寂しさが迫る。「唯神のみを頼め」といふことばを思ひ出す。強い同情を求むる心が悲しい。今の自分から脱却したい。」

私はかうしたあなたの病院生活に於てその心と肉体とに加へられた強い鞭撻を思はずには居られません。私は今でも白いベッドの上に静かに横つたかばそい貴女のからだを見ることが出来る様にその安らかな寢息の中に絶間なくひびいた強い生の息つかひを聞くことが出来ます。

蛙の聲がする頃届いた手紙きりでその後の御様子も少しも知らない上に元來が貧弱な頭と徹底せぬ活き様を續けて居る私には貴女の深い強い高潮の生活を思ひみることも許されません。終りの數十日を「如何に生活されたか」の答は表面的なことばの繰り返しか死と面接すると同時に生に面接された貴女の生活の憶測に後もごり